

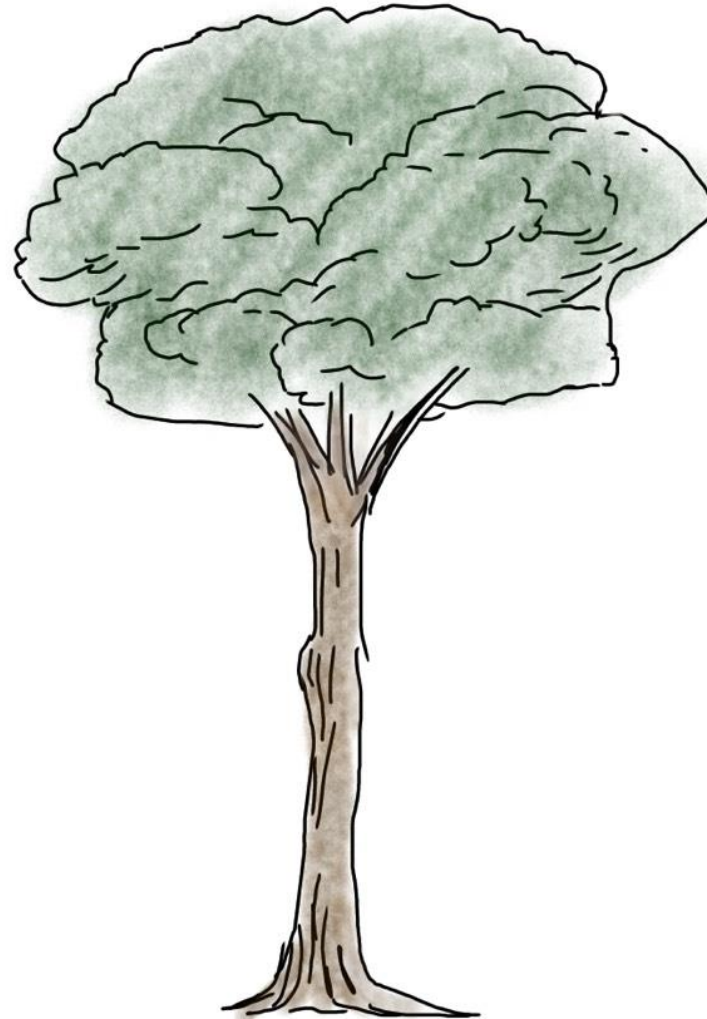
なんじゃもんじゃの木

文・絵 柳本 日菜

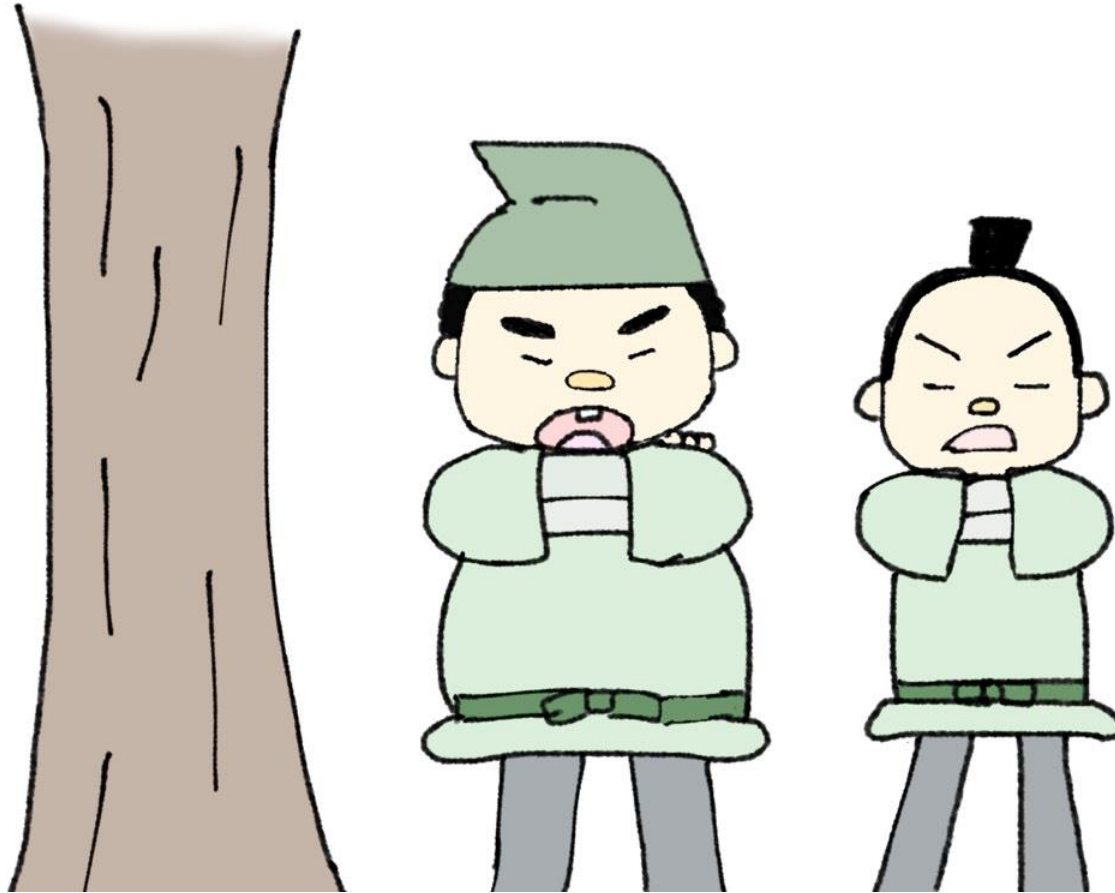
秋草学園短期大学 文化表現学科



昔、ある村の畑の中に、ぴよこんと一本、見たこともないような木が生えてました。何の変へんてつもない木でしたが、村人たちは愛着をもって「なんじゃもんじゃの木」と呼んでいました。

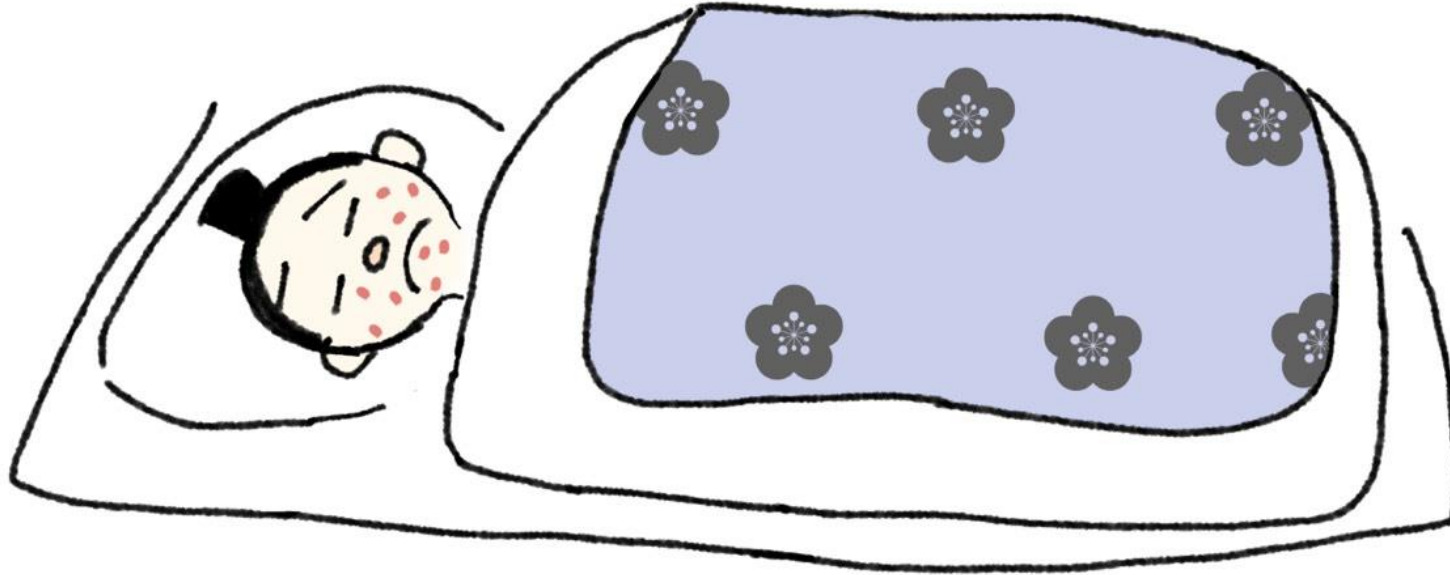


ところが、村には乱暴者でへそ曲がりな親子がいました。
ある時、「何の役にも立たない木なんか、へし折ってやる」と、
息子がなんじゃもんじゃの木の枝に殴りかかりました。



すると翌日、息子の体に一文銭のような丸いブツブツができ、高い熱が出て寝込んでしまいました。

村人たちは「きっとバチがあったんだろう」と噂し、この一件から「なんじゃもんじゃの木さま」と言って、まるで神様のように木を崇めるようになりました。



こうなってくると、父親はますます面白くありませんでした。
父親は斧を持ち出し、なんじゃもんじゃの木を切り倒そうと、
幹に斧を振り下ろしました。



翌朝、父親の体には丸いブツブツができ、息子と同じように高熱がでて、寝込んでしまいました。

親子はあちこちの医者にかかりましたがなかなか回復せず、おかげで財産をすっかり使い果たしてしまいました。



このことから、村人たちは「むやみに木を傷つけたりしたら、なんじゃもんじゃ様のバチがあたる」として、これまで以上に木を大切に扱うようになりました。
その後も、なんじゃもんじゃの木は「木の神様」として大事にされたそうです。

